

『言葉の意味に思う』

自分がそれまで正しくないと思っていた言葉の意味の捉え方が、実はそうではないということがいくつかありました。そのことを知った瞬間は、なかなかの衝撃がありました。

一つ目。学生の頃にたまたま目にしたある解説が絶対と信じ、以後こだわりを持って使っていた言葉があります。「的を射る（まとをいる）」です。

その解説には、「“的は射る”ものであり、“的を得る”は誤用。“当を得る（とうをえる）”が正しい」と。実は私も、「的を得る」の方を使っていました。

ちなみに、「的を射る」の意味は、うまく目標に当てることから転じて、“うまく要点をつかむ”であり、「当を得る」の意味は、“道理にかなっている。また、要点をしっかり押さえている”とのこと。

私は、素直に「なるほど」と納得し、以後、「的を射る」という表現にこだわってきました。教員は、子どもにとっては最適な言語環境でなければなりません。よって、言葉の使い方には細心の注意を払う必要があります。

ですから、同僚（管理職になってからは、職員が）が、会議の中で「それは、的を得ていると思います」のような発言を耳にすると、「それは違うよ。“的を射ている”だよ」と、つい心の中で反応してしまいます。

ところが最近、「的を得る」という表現が、誤用ではないようだということを知りました。自分としては、ちょっとショックな出来事でした。

ある国語辞典では、改版に当たって再検証を実施し、「得る」の字義を「うまく捉える」の意と捉えれば、「的を得る」も誤用とは当たらないとしています。また、平成24年度の文化庁による「国語に関する世論調査」によれば、30代以降の世代では、4割強の方が本来の言い方ではない「的を得る」を選んでいると報告されています。

「的」を、「標的」と狭義に解釈すれば、「的を得る」は、正しい言い方ではないと思うのですが、「的」を「要点」や「核心」を意味する例えとして押さえたならば、それはそれで意味が通るかと納得しています。

とは言え、これからも、私は、本来の言い方である「的を射る」にこだわりたいと思っています。なお、「的を射る」について調べているうちに、「正鵠を射る（せいこくをいる）」という表現を知りました。「正鵠って何だ？」の状態でしたが、「正鵠」とは、弓の的の中心にある黒点のことを言い、「正鵠を射る」とは、“物事の急所や要点をつく”意味だそうです。これについては、“目からうろこ”の状態であり、自分としては機会があれば使ってみたい表現だなと強く感じた次第です。

次に、王監督（ダイエーホークスの時代だったと思います）が、使っている場面をテレビで観てから、それまでの捉え方を変えた言葉があります。「全然」です。

「全然だめだ」のように、「全然」は、打消しや否定的な語を伴って使われるものと捉えていました。子どもの頃の国語の授業では、そのように指導されたと記憶しています。ところが、王監督は、あるインタビューに「全然いいです」と答えたのです。私は、目が点になりました。

その頃、「全然、平気です」のように「全然」の後に否定形を用いない言い方に触れることが増えていました。「“全然”の後は、否定表現だろう」と、内心「言葉の乱れが・・・」などと、悶々としていた時だったので、王監督のこの発言は、「青天の霹靂」に近いものがありました。

私が尊敬するあの王監督が「全然いいです」と発言されたのです。「王監督が判断基準か」と思われるかもしれませんが、この点についてはそうなのです。私の中では、王監督は、紳士の紳士であり、まわりへの感謝を忘れず、常に謙虚です。とにかく人柄が素晴らしい。そして、よく考えて発言される方だという捉えをしていましたので。

以来、私の中では「“全然いい”もよし」となりました。今では、「全然、大丈夫です」と、何の抵抗もなく使っています。たださすがに、「全然おいしい！」の類は、抵抗があります。やはり「非常においしい、又はとてもおいしい」だと思っています。

最後に、「やばい」。

本来の意味は、「あぶない。まずい。問題が多い」です。自分の身に危険が迫っていたり、何か不都合なことが予想されたりした時に使われる言葉だと捉えていました。

ところが、とりわけ若者が、「これ、やばい！」という言い方を頻繁にするようになりました（2000年頃かららしいです）。何でもかんでも、「やばい！やばい！」なのです。

私は、当初、「これは、まずいよ。ダメだよ」という意味で使っているものと思っていましたが、何と「とてもすばらしい」という意味でも使っていることに気づきました。いや、むしろ後者の意味で積極的に使っているらしいのです。

明確にこのことに気づいたのは、極小規模校に勤務していた時です（10年程前）。子どもと教職員が、みんな一緒になって給食を食べるのですが、その際の会話の中で（私の目の前で）、高学年の女子が「〇〇、やばい！」と言ったのです。何に対してそう言ったのかは忘れましたが、その時の状況からは、どう考えてもその「やばい」が、「あぶない」とか「まずい」とか「問題あり」を意味しないので、その子に訊きました。「今の“やばい”は、“すごくいい”という方の意味ですか？」彼女は、「そうです」とうなずきました。

平成26年度の文化庁の先の調査では、「とてもすばらしい」という意味で「やばい」という言い方をすることが「ある」と回答した割合で、30代が53.9%、40代で32.8%とのこと。私と同世代の方でも1割強は「ある」なのです（なお、20代が79.1%、16～19歳が91.5%）。

今のところ、機会があったら使ってみようかという気持ちはありませんが、もしかしたら、何かのはずみで「〇〇、やばい（とてもいいという意味で）」とつぶやく可能性はないわけでもないと思っています。さらに、もしかしたら「〇〇、まじ、やばっ！」も有り得るかもと。

文化庁の「国語に関する世論調査」は、平成7年度から毎年行われています。設問は、その時々状況を捉えたものになっており、ある意味その時代を反映していると感じています。この調査の結果を読みますと、自分の言葉に対する捉え方や日本語の表現について振り返る良い機会になるとと思っています。